
魔法少女まどか パニック リベンジ

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか パーツク リベンジ

【Zコード】

Z5182Z

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

今日も水晶は先日魔法少女になつたばかりの少女、さやかのサポートを引き受けている。

水晶は魔法少女ではない。

しかし彼女は、最近物騒な地域から転校してきた実戦経験者だった。その日は体よく魔女を退治することができ、先輩魔法少女である巴ミミと祝杯を上げる。

次の日、そんな彼女たちの学校に転校生がやってくるのだった……。

第1話（前書き）

ほむらが旅した、違う時間軸のお話です。

性格はかなり違いますが、大ヒットライトノベル【フルメタル・パニック！】の主人公を意識して書きました。

こんな世界観もアリかな、という方はぜひ読んでみてください。

魔女の結界内。

三人の少女が、そこに取り込まれている。

二人の少女が魔女と戦い、もう一人の少女は緊張の面持ちでその戦いを見守っていた。

一人の少女が、魔女に向かつて手にしていたライフルを構える。
発砲！

正確無比の射撃。

銃弾は魔女を捉え、その動きを緩慢にさせた。

「さやか、今よー！」

少女の怒号が、あたりに響き渡る。

「わかった！」

さやかと呼ばれた青い布鎧に身を包んだショートヘアの少女が、両刃の剣を大きく振りかぶった。

「もうつた！」

振り下ろされた大剣は見事に魔女に命中する。

断末魔さえあげず、ぐずおれる魔女。

「さやかちゃん、やつた！」

今まで固唾を飲んで見守っていたもう一人の少女…鹿田まどか…が、
歓喜の声を上げる。

「くへへ、あたしたちのゾンビにかかるば魔女なんて……ね、水晶^{ホワイト}？」

「油断は大敵だけじね……でも、私達はいいゾンビだと思つわ」

万が一に備えライフルを構えていた水晶、と呼ばれた長身の少女は、そう答えて警戒を解く。

緩やかに波打つセミロングをかきあげて、その年頃の少女らしくない精悍な顔つきに笑みを浮かべた。

しばらくして空間が歪みはじめ、少女たちの周りに日常が戻っていく。

もうすっかり、陽は暮れていた。

「あつ……」

さやかが、喜びの混じった声を上げた。魔女がグリーフシードを落としたのだ。

「良かつたわね」

魔女が存在した場所に駆け寄り、大切そつにそれを手にしたさやかに、水晶は笑みを向けた。

「うん。これでしばらく、また全力で戦えるわ」

さやかはそいつてソウルジョムを取り、さつくグリーフシードに穢れを吸わせる。

グリーフシードがわずかに闇を帯びた代わりに、さやかのソウルジエムが完璧な輝きを取り戻した。

「見事な戦いぶりだつたね、ふたりとも」

「どこからともなくぴょこん、と優らしくも奇怪な姿をしたいきもの
が少女たちの前に現れる。

「キュウベえ。いつから?」

「キミが魔女を打ち倒したところからさ」

さやかの疑問に、ニコニと笑ってキュウベえは答えた。

「君たちは本当にいいコンビだ。ところでもどか、水晶……」

キュウベえの声に、真剣さがこもる。

「そろそろ、僕と契約して魔法少女になつてくれないか?」

キュウベえのその言葉に、まどかと水晶の二人はあわせて首を横に
振つた。

「わたしはまだ、命をかけてまで叶えたい願いなんて決められない
し……」

「私は友人の手助けをしているだけ。願い事なんて興味ないわ
「……そうかい」

人間なら肩でもすくめそうな口調でキュウベえはそう言つと、

「まあ、その気になつたらいつでも言つてよ。どんな願い事でも、
1つだけ僕は叶えてあげられる。その時まで、僕は待つてるよ」

とだけ言い残して、またいざこかへと去つてこつた。

「……なんかいつもここなのよね、あこつ」

キコウべえの気配が完全に消えたのを確認してから、ぽろつ、と水晶は本音を漏らす。

「ん~まあ、そりなんだけどね。でも、恭介の腕を完治させてくれたのは確かだし。あたしはこちおり、感謝してるかな……」

いやかはりつて、少し顔を赤らめた。

「でも、水晶ひやんはす」いね。魔法少女でもないのこ、いやかちやんをサポートして……。わたしなんて、みてるだけで邪魔になつてるんじゃないかな……」

「そんなことないよ」

いつむこてそんなことをつまどかに、水晶はフォローを入れる。

「おひかに見守られてる、ってだけで、私もさやかも、すじこ力もらつてるよ。特にさやかは、キミの応援に戦つ勇気を支えてもらつてこるよつね」

「ん……まあ、やつこつ」と

まどかに照れ笑いをむけ、さやかはぽりぽりと頬をかいた。

「マリ先輩のほうも、片がついてるんじゃないかな? それとも、待ち合せのフロアに行つてみましょ?」

水晶の提案に、さやかとまどかはつさと声を揃えて返事する。

（それ…………キミが魔女狩りにこだわることの理由も、わか
つてない。心配しないで。私がついている限りやかは絶対に守つて
みせるし、キミに、も、うさんくさい契約をさせることはないから）

水晶はまだかの耳元でそつとささき、力強い笑みを浮かべるのだった。

三人が向かったファミレスは、夕食ビュッフェとこうこともあります、結構な
混雑ぶりだ。

しかし、先客が三人のことを云々ておこでくれたらしく、ウエイト
レスは笑顔で席に案内してくれた。

「みんな無事だったのね、よかつたわ」

温かい紅茶を手に、気品のある微笑で三人を迎えてくれたのは、1
つ年上の田中マリ。

穏やかなオトナの雰囲気の持ち主で、大きなツインのドリルヘアが
よく似合っている、まだかたちから見てもほんとうに綺麗な少女だ
った。

「マリさんも無事でよかつた」

「やせかはマリの無事を喜び、ドリンクバーをウエイトレスに3人前
注文する。

まだかとやせかはマリの正面をすり、水晶はマリの隣に腰掛けた。

「由縁さんも、無事でよかつたわ。あなたは、魔法少女じゃないか

ら……。まあでも、貴女に関してはあまり心配していないんだけど

ね

「あへつ、マミ先輩。それはちょっとひどいですか」

「冗談っぽく言つマリ、由縁、と苗字で呼ばれた水晶も冗談っぽく
むくれてみせる。

彼女のフルネームは由縁水晶といつのだ。

「だつてあなたは……」

少し周りをはばかるような声で、マリは言つた。

「本物の、戦場帰りだものね……」

マリの言葉に、少女たちの周りの空気が、少し重たくなる。

「や……やだなあみんな……。ちよつと育つた環境が特殊だつただけ
で、私はただの帰国子女で……」

そう言つて水晶はあはは……と乾いた笑いを漏らす。

実は彼女、中学2年生の1学期にA国からやつてきた帰国子女なのである。

A国の惨状は、それこそ中学生でも知っている。

長年内戦や紛争が続いており、そのせいで毎年多くの人が亡くなっている。

そんな苛烈な環境で、水晶は生きてきた。

物心ついた時から少女兵として、戦つて生きてきた。

水晶がA国からの帰国子女、というのは学校やクラスのみんなも知つていることだが、彼女が兵隊をしていた、という事実はここにい

る3人しか知らないことだった。

「……あつ、わたし、ドリンクバー入れてくるよ。さやかちゃん、水晶ちゃん。ついでに入れてきてあげるよ。何がいい？」

重くなつた空気をフォローしようとしたのだろう、まどかがそう言って作り笑いの見本のような笑顔を浮かべる。

「あ、悪いね。じゃああたしはオレンジジュース」

「……私も同じので」

水晶の過去の話は、そこまでだった。

あとはまどかの持つてきてくれたジュースで魔女退治の祝杯を上げ、年頃の女の子らしい話題で盛り上がり、夜は更けていった。

翌日、朝のホームルーム。

「……といつわけで、転校生を紹介します」

今朝の痴話喧嘩の憂さを晴らしてから、担当教諭はようやく本題を切り出した。

（……ねえ、まどか。ふつう先に転校生の方を紹介しない？）

（まあ、あの先生だし）

水晶とまどかが席の前後でポソポソ話をしていると、ガラリと教室の扉を開けてひとりの女子生徒が入ってくる。

髪の長い、綺麗な少女だ。

今は無愛想な無表情をそのかんばせに張り付かせているが、笑えぱ
きつと、とてもかわいいだろ？。

彼女が、最前列の席にいる水晶の前を通りすぎる。

「……」

水晶は彼女から、懐かしくも危険な匂いを感じ取った。
平和すぎる日本では、まず感じることない匂い。

すなわち、【硝煙の匂い】。

思わず、身を固くしてしまう。

「……」

あちら側も、水晶に視線を送ってきた。
切れ長の瞳から発せられる、冷たい視線。

転校生の少女も、こちらのきな臭さに気づいたのかもしれない。

「どうしたの、暁美さん？」

「……いえ、なにも」

一瞬だけ水晶に目配せをした転校生だったが、何事もなかつたかの
ようにつかつかと教壇の前にやってくる。

「では、自己紹介をどうぞ」

「……暁美ほむらです。よろしくお願ひします」

挨拶を促された転校生は、型通りの挨拶をしてペコリ、と頭を下げ

た。

.....

氣まずい沈黙。

「は、はい。では暁美さんのお席はあの窓に向むけたところです。それではみなさん、仲良くしてくださいね」

そう言つと女性教諭は、授業開始のチャイムと共に、教室から去つていつたのだった。

1時限目と2時限目の間の、短い休み時間。

転校生の周りには、黒山の人だかりができている。
在校生からのいろいろな質問に、転校生のほむらはテントプレート通りに答えていく。

「.....すこし、いいかしら」

間に入ってきたのは、水晶だった。

ほむらの周りにいたクラスメイトの女子たちが、怪訝な表情を浮かべる。

水晶は物騒な地域からの帰国子女ということもあり、クラスの中で少し浮いていて、たやかやまどか、そして仁美たち以外との接点がほとんどなかつた。

そんな彼女が、転校生に興味を示して輪の中に入ってきたのだ。クラスメイトたちが少し戸惑うのも、無理はなかつた。

「暁美ほむりやん……つてこの？私も色々聞かせてもらひたい

？」

「……どひだわ」

無愛想だったほむらの声に、警戒の色が混ざる。

ただそれは、普通の学園生活を送る中学生には『氣づく』のできない程度のものだったが。

「どこの中学校から転校してきたの？」

「……中学校よ」

「……知らないわね。どの辺にある学校？」

クラスメイトの女子たちが顔を見合わせる。

中学はこの見滝原中学校からそれほど離れていない場所にある、公立の学校だ。
もちろん水晶とて、知らないわけがない。

「意地の悪いことを言つのね、あなた。隣の学区にある中学校よ」

相変わらず無表情のまま、ほむりはそりつ、とそう答える。

「あらやつ。私も今年転校してきたばかりだから、知らなかつたわ。意地悪するつもりなんてなかつたの。『ごめんなさい』

そうつって水晶はペコッ、と頭を下げた。

しかし、質問を辞めるつもりはないようだ。

「……なにか、貴女アルバイトとかしてる？」

「……しているわけがないわ。だいたい、中学生を雇つてくれると
いろなんてあるの？」

「ないわね、普通は」

周りにいたクラスメイトたちも、さすがにこの二人の間にある緊張を感じないわけにいかなかつた。

この二人のやり取りは在校生と転校生の会話、と言つより、まるで水晶からぼむらへの尋問のようだつた。

「……なにがいいたいの？」

「ん……いや、私も海外から今年転校してきた身だから。友達になれたら、と思って色々聞いてみたんだけど……ちょっと、突っ込みすぎたところまで聞いちゃつたかな？ 気分を害したのなら、ごめんなさい」

水晶は再び謝ると、腕時計に視線を落とした。

「あと休み時間も数分ね。親切に色々答えてくれてありがとう」

「……」

ひらひらと手を振りながら席に戻る水晶を、ぼむらは厳しい視線で見送つたのだった。

続く。

第1話（後書き）

こんにちわ、ソースケです。

最後までお読みくださいまして、まことにありがとうございます。
魔法少女まどか パーツク第1話をお送りしました。

いかがだつたでしょうか。

少しでも楽しんでいただけたのなら、幸いなのですが。

タイトルにリベンジ、とあるのは以前似たようなタイプのううを投稿させていただいていたのですが、残念ながら削除してしまい、今度は絶対にそんな作品にしないぞ！という意気込みです。

このううは本編に登場した5人の魔法少女全員のハッピーハンド田指して頑張つていきたいと思つています。

読者の皆様、ぜひ応援よろしくおねがいいたします。

それではまた、次話でお会いいたしましょう。

第2話（前書き）

ほむらが旅した、違う時間軸のお話です。

性格はかなり違いますが、大ヒットライトノベル【フルメタル・パニック！】の主人公を意識して書きました。

こんな世界観もアリかな、という方はぜひ読んでみてください。

転校生がやつてきた、その日の放課後。

「ねえ、水晶ちゃん。1時間のあの休み時間、ほむらちゃんとケンカしてたの？」

まどか、さやか、水晶の3人で通学路を歩き、軽い談話を楽しんでいたのだが、まどかが急に話題を変えた。

「ん？いや、ケンカなんかしてないよ」

「でもクラスの子が、すついこい一人の間の雰囲気悪かつたって……」

あのあとほむらは『気分がすぐれない』と訴え、びつやつて転校初日に知り得たのか、保健委員であるまどかを指名し、教室を出でいったのである。

「ん……。私はそんなつもりなかつたんだけど、彼女は私の質問が気に入らなかつたみたいね。それでちょっと怒らせちゃつたみたいだから、そんな風に見えたのかもね」

そう言って水晶は苦笑いを浮かべた。

「まあ、転校初日からああいうふうに聞かれたら、やつぱりちょっと気分悪いかもね。水晶もだいぶ、こっちでの生活に慣れてきたようだけど、もうちょっと人の機微つてかわ、空氣読めるようになつたほうがいいかも」

「そうね……」

さやかの言葉に、水晶は神妙な表情を浮かべて返事した。

幼い頃から紛争地帯で育つてきた彼女には、日本女子独特の『空気を読む』という意味がよくわからない。

「あっ、じゃああたし、ちよつと恭介の顔見てくるよ。少しの間、待つてもらえるかな?」

目的地…上條恭介が入院している病院…にいつと、さやかがはにかんだ笑顔でそういった。

「うん、わかった」

「急がないから、ゆっくりお見舞いに行つてくるとこいよ」

まどかと水晶は、そんなさやかを笑顔で送り出した。

「……さやかの幼なじみつてさ、たしかキュウベえとの契約で、すっかり怪我良くなつたんじやなかつたつけ?」

水晶が小さな疑問を呈すると、まどかは事情を知つていたらしく、それを説明してくれる。

「うん、そなんだけど……なんでもあれだけの怪我をして、後遺症が全くなしに回復する、つてのは医学的に見て考えられないことらしいよ。それで、いつ……いろいろな検査とか調査とか、そういうので入院が長引いてるみたい」

「なるほど、一種のモルモットってわけか……」

率直な意見をぽろりともらした水晶に、まどかは苦笑いを浮かべた。

「少しの間、つてさやかちゃん言つてたけど、話し込むと長くなる

かもしだれないから、わたしたちも病院の待合室で待つていよつよ

「そういうまじかに水晶はそうだね、と軽く返事して、病院内へと入つていつた。

「いやあ、『めん』『めん』。すつかり話し込んでやつて。恭介も入院生活が暇らしくて、なかなか帰してくれなくてさー」

などとさやかが照れ笑いを浮かべながら一人の元へ帰つてきたのは、小一時間が過ぎた頃だった。

「ん、大丈夫だよ。わたしたちもおしゃべりしてて、退屈しなかつたから」

笑顔でそういうまじかに、水晶もうとうん、と嫌な顔ひとつせず相槌をうつ。

「お詫び、つて言つたらなんだけど、ジュース奢らせてもらうから！ここからだと……病院の外にある喫煙所前の自販機がちょうど帰り道で近いかな？」

「そんなこと、気にしなくていいのに。でも、せっかくそう言つてくれるんなら、『じちそうにならうか、水晶ちゃん』

「そうだね」

さやかの提案に一人は同調し、病院の外に出て自販機に向かつた。

それをみつけたのは、自販機の置いてある場所のすぐそばだった。

「さやかちゃん、あれ……」「

不安げな顔で、まじがか一角を指す。

「……グリーフシードだね。しかも、孵化しかかつてゐる……」

拳より一回りほど小さいからは、黒い靄を放出し、ドクンドクンと波打つていた。

「さやかちゃん、これって放つておいたら魔女になっちゃうんでしょ?」「

「そうだね」

「今のうちに何とかできないの?」

「うーん……ヘタに刺激すると、すぐに孵化ちやうかもしないし……マリさん見てもらえば、あたしの手に負える魔女なのか分かるんだけど……」

新米魔法少女のさやかは、魔女狩りのときほこりもマリの彼女でも戦える魔女かどうか判断してもらつてから、戦いに赴いているのだ。

「でも、放つておくわけにもいかないな……」

病院というのは、体や気持ちが弱つている人たちの集まりとも言える。

そんな場所で、魔女を孵化させる訳には行かなかつた。

なによりここには……恭介が入院している。

「まじか、マリさんを至急呼んできて。あたしはここで、グリーフシードを見張つてる」

「わかった！」

さやかの言葉を受けて、まどかは慌てて駆け出していつてくれた。

「水晶。申し訳ないんだけど、いざつて時のサポート頼んでいい？」
「OK」

そう返事すると、水晶は一見バットか竹刀でも入つていそうなケースを手元にたぐり寄せた。

この中には、長年愛用しているライフル銃が入つているのだ。もちろんこれをケースから取り出すのは、魔女の結界に完全に取り込まれてからだ。

その結界が、グリーフシードを中心にして、だんだん日常を侵食し始めた。

「ねえ、水晶」

「うん？」

魔女狩りや教室では、大抵まどかと一緒にいることが多い。ふたりきりの今は、いい機会だと思えた。

「どうして、こんな危険なことに付き合つてくれるの？あなたには、なんの見返りもないのに」

さやかの疑問に、水晶は短く答える。

「友達だから」「そつか……ありがと」

さやかのお礼に、水晶はポリポリと鼻の上を搔くだけだった。

「あとで……」

「うん?」

「どうして、水晶はまどかが魔法少女になることに反対なの? あたしが魔法少女になろうとした時も、マリやセレナやキュウベえの話を聞いて、猛反対したよね」

「それは……」

水晶の視線が、宙に浮く。

なにか、言葉を探しているような感じだった。

「闘争とは無縁なキミたちを笑顔を見ていると、私はとても幸せな気持ちになれるの。いや、そりやキミたちにもいろいろあるのは分かってるわ。でも、日本で暮らしていたら実感したくいと思つけど、キミたちは奇跡のような平和を享受しているのよ。そんなキミ達が、わざわざ戦いの世界に足を踏み入れることはないんじゃないかな、と思つだけ」

「……」

普段は忘れがちだが、水晶はそれこそ、さやかたちには想像もできないほど過酷な過去を生き抜いてきている。

彼女の口調は平穏そのものだったが、それだけに実感がこもつており、さやかはそれ以上言葉をつなげることが出来なかつた。しばらくして、ふたりが完全に魔女の結界に取り込まれる。

パキ……パキパキ……

「つ……もう瞬りそづね」

さやかは覚悟を決めたらしく、ソウルジムを輝かせて魔法少女に

変身し、臨戦態勢に入る。

もう魔女がグリーフシードから出てくるか……そんな時だった。

「おまたせ！」

まどかが、マミを連れてやつてきてくれた。

「ま、間に合つた……」

さやかは安堵の溜息をもらす。

まだまだ経験の浅い彼女にとつて、強さや属性のわからない魔女との戦いは避けたいところだった。

「お出まつのところ悪いけど、一気に手をつけてやるわ！」

マミはそつと、出てきたばかりの魔女を得意のリボン操作で拘束してしまい、そして魔力で召喚したマスケット銃を手に取つて銃弾をなん発がお見舞いしてやる。

ベテラン魔法少女らしい、手際のいい洗練された動きだ。

マミの連續技を受けて魔女は大きく吹き飛ばされ、動きが緩慢になつた。

「これで……！」

マミが、必殺の大砲を構える。

その瞬間だった。

拘束され、瀕死だったはずの魔女の口から、巨大な一口の首のようものが吐き出された。

「……え？」

それは大きく口を開け……。

「ユイーン！」

マリの後ろから、銃弾が飛弾した。

水晶の射撃だった。

実戦で鍛えあげられた危険への嗅覚が、マリの優勝モードが漂っていたなかでも、水晶を決して油断させなかつた。その銃撃を受け、一瞬だが魔女の動きが止まる。よひよひ危険を察したマリが、とにかく身をかわそうとした。

「ああ……あやあああああああつ……」

この世のものとは思えないと悲鳴が、マリから上がる。なくなっていた。左腕が。

根元から。

あの魔女の巨大な口に、持つていかれたのだ。おびただしい量の血液が、傷口から流れ出る。

「まじかー、マリを見るなー！」

「うづぶと、水晶はまどかを地面に押さえつけた。

こづこづの時、一番怖いのが戦闘や負傷に不慣れな者のパニックである。

それから脱兎の勢いで負傷したマリを抱え込み、その場から離脱させた。

幸い魔女は、食いつきつた彼女の腕を味わうのに夢中のようだった。

「マミヤー、マミヤー。」

さやかがあわてふためいて「ひらへ駆けてくる。

「うわあああっ！ いたい、いたいのつーすゞくいたいのつー左腕が、すくいたいのつー」

マミは失った左腕を凝視しながら、泣き叫び、激痛にのたうち回る。いつの間にか魔法少女の服装は解けてしまい、腕から流れる血液がマミの制服を穢していった。

「あわてるなつー。」

水晶はまず、パンツーと軽くさやかに平手を入れて平常心を取り戻させる。

「さやか。魔女のヤツがこっちに来たら、キミが魔女と戦つんだ。マミ先輩の応急処置がすんだら、私も加勢する」「でも……マミさんでも負けちゃう魔女相手に……」「つべこべいうな！ お前の両腕は男の背中に引っかき傷をつけためだけにあるのかー？」

「つ……ー。」

深い意味はわからなかつたが、水晶の迫力に押されて、さやかは大剣をまだマミの腕を貪つている魔女に向けた。

「それから……ひどく気に入らないが、キミの使えるテレパシーとやらで、キュウべえに連絡をとつておこしてくれ」

やつややかに言こと終えると、次に負傷したマリにカツを入れる。

「『わやあぎやあ喚ぐんじやない！あなたも、歴戦の勇者だろう！止血点はわかるか？』『だ、ここをしつかり抑えろ。思いきりだ

水晶の怒声に、マリはわずかに落ち着きを取り戻した。

ガタガタ震える右手を水晶に誘導された止血点にあてると、ぎゅつ！と言われるとおり全力で押される。

「よし、それでいい

水晶は自分のバストからブラジャーを外し、それをひもがわりにしてマリの出血部をきつつきつと縛り上げた。

それからカバンの中に入ってる医療キットをひっぱり出す。

魔女狩りについていくようになつてから、いつでも怪我した魔法少女達の応急処置ができるよう、兵隊時代の装備を持ち歩くようになっていた。

慣れた手つきで注射器を取り出して薬物を吸わせてから、駆血帯でマリの細腕を縛りそれを静脈に注射する。

薬を打たれたマリは、うう……と小さな呻き声を上げて、昏睡状態にはいったようだ。

「マリさん、大丈夫なの……」

顔面蒼白のまどかが、不安げな表情で水晶に尋ねる。

「ああ。血は一応止まつたし、薬で眠らせたから無駄な消耗もないだろう。ただ……問題はあいつだな」

マリの腕を食い終わった魔女は、次なる獲物を求めてこちらへ視線

を向けてきた。

「来る……！」

「そんな気配だな……」

さやかが大剣を構え直し、水晶も7年間使つている愛用のライフルを魔女に向けた。

「まじか。万一さやかと私が倒されたら……もうすぐやつてくれるはずのキュウベえと契約して魔法少女になつて、ヤツを倒してくれ。生きてさえいれば、なんとでもなる」

「水晶ちゃん……」

「願い事なんて何でもいい。本當はキリにそんなことをさせたくないんだが、死ぬよりはました。いいか、生きていれば……」

「……その必要はないわ」

どこかで聞いた、醒めた少女の声。

魔女がこちらへ襲いかかつてくる……！

そう思つた瞬間だった。

「！？」

何が起つたのだろう。

大爆発が起つたかと思つと、魔女は一瞬のうちに四散し、「シン」と新しいグリーフシードだけを残して消えてしまった。周りの景色が、日常を取り戻す。

「ほむらひやん……？」

その少女は今日転校してきた暁美ほむらだった。

彼女はまどかを一瞥すると、グリーフシードを拾い上げ、スカートのポケットになおしこむ。

「あんた、魔法少女だったの……」

さやかの質問にも、ほむらは何も答えなかつた。

「……暁美さん。すまないが礼はまた後日させてもらつ。こひらは負傷兵がいるもんでな」

こんこんと眠り続けるマリを背負い、水晶は形だけほむらに頭を下げた。

助けてくれたのは事実であったが、ここにまどかがビリも、信用できない所がある。

「マリ先輩の白毛は、こひらだったな……」

わざとらしく呟くと、水晶は病床兵を背負つてこむとは思えない速さで、その場をあとにしたのだった。

「……マリさん、大丈夫なの?」

自毛のベッドに横たわり、規則正しい寝息を立ててこむを、心配そうにまどかが覗き込んだ。

「うん、命に別状はないと思つ。ただ、病院に連れていくわけにも行かないわね……」

そういう水晶に、まどかとわやかが顔を見合せる。このよつな怪我を負つてしまつた原因を、医者ひづり説明すればいいのだひづり。

彼女たひては、女子中学生が片腕をなくすよつな事情を、ひまく嘘でひまかす自信がなかつた。

「消毒薬と抗生物質ぐらこは手に入るから、じぢぢくへは私がマミ先輩の面倒をみるわ。それに、魔法少女つて怪我には強いんでしう？」

「うん、確かにそうだなび……」

さやかが自信なさ氣に応える。

彼女も魔女狩りで多少の怪我の経験はあつたが、四肢を失つまどの怪我の経験は、さすがになかった。

「じやあ私は早速家に戻つて薬を取つてくるわ。サヒタヒモウ、ひせきまど、家に帰つたほうがいい」

そつこつ水晶は、さやかとまどかは首を横に振つた。
やまづ、マリのじが心配なのだひづり。

「……ひづり。じやあせめて、親御さんとは連絡しておいてね

水晶はそつ言ひて、一回皿せき戻ることある。
マンションのホールを出ると、もつ甯闇があたりを支配していた。

「マリは、助かったよだね」

感情の全くじもらない声。

白く、愛らしくも奇妙な姿をした生物が水晶に話しかけてきた。

「……キュウベえ」

「あれだけの怪我をしたら、普通は助からないものさ。腕をなくしてしまつたら戦闘不能に陥るだろ？」「大怪我をしたショックでパニック状態になる子もいる。マミが助かつたのは、キミのおかげだろ？」「

「……マミ先輩は、立派な戦士だつた。怪我のあともわずかに混乱しただけで、あとは私の指示にきちんと従つてくれた。マミ先輩が生き残ることができたのは、彼女の強さだ」

「……でももう、マミは戦うことができないだろ？」

「そうだろうな。残念だが、魔法少女は引退つてことになるだろ？」「ね」

水晶がそう言つて、キュウベえは何か一物含んでいそうな笑みを浮かべる。

「ん？君は何か、勘違いしてないかい？」

「勘違い……？」

「そうさ。魔法少女になつた以上、彼女たちは戦い続けるしかないんだ。そういう契約だからね」「なにをバカな……！」

珍しいぐらいに憤り、水晶はキュウベえの首根っこを掴んで持ち上げた。

「四肢を喪失した兵士が、戦えるわけがないだろ？」「貴様は兵に死しろといつていいのか！？」

「そんなこと、僕はしないよ。とにかく、魔法少女になつてしまつたら、彼女たちは魔女を狩り続けるしかないんだよ」

「ふん、勝手に言つてろ。戦う、戦わないは個人の自由のはずだ。」

さやかだつて、いつまでも半人前じゃない。私もサポートにつく。
マミ先輩が戦えなくても、この街を魔女から守つてみせる」
「やれやれ……」

意気込む水晶に、キュウベえはわざとうしくため息をついた。

「魔法少女になる、といつことはそういうことじじゃないんだよ。意識的に魔力を使わなくても、彼女たちのソウルジムは濁つてくる」「それがどうした」

「そりゃしばらくは大丈夫や。でもね、ソウルジムが濁りきると……」

「どうなるつていうんだ」

「さあね？ それは君が魔法少女になつて確かめてみればいいんじやないかな？」

馬鹿馬鹿しい。

水晶は、これ以上キュウベえの話を聞く気になれなかつた。ふん、と嘲笑のはな息をついてから彼を解放し、薬をとりに自宅へを足を向ける。

そんな水晶に、キュウベえはいつもの平坦な声で語りかけた。

「水晶、君は人を殺しているね？ それも、たくさん。10や20で、利かない人数を殺しているはずだ。それに、その奇抜な名前も、君の本当の名前じゃないね」

続く

第2話（後書き）

こんばんわ、ソースケです。

魔法少女まどか パーツク第2話をお届けしました。
少しでも楽しんでいただけたのなら、幸いです。

さて、今回はマリさんと例の魔女と決闘するシーンを書いてみました。

ハッピーハンドを目標す、と宣言している以上、ソレでマリさんに死んでもらうわけにこきません。

しかし、戦う上で大きなハンディキャップを背負つてしましました。
これから彼女が自分の運命にどう立ち向かっていくのか。
そのあたりも楽しみにしていただけたらな、と思います。

次回は水晶の過去と、マリさんのこれからのお話になつていくと思います。

よろしければ、これからも応援よろしくおねがいいたします。
ではまた、次作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5182z/>

魔法少女まどか パニック リベンジ

2011年12月20日19時50分発行